
アリスとハンナ

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスとハンナ

【Nコード】

N5107M

【作者名】

名無し

【あらすじ】

内向的なロシア人少女アリスと、中性願望のある日系米国人女性ハンナの話です。（※同タイトルの処女作の書き直しです）

プロローグ(1)

窓の外では、月明かりに照らされた眩しい牡丹雪が、滾々と降り続いている。その月光が差し込んでいる部屋の中は薄暗く、まるでそれは、この惨めな哀れな私の事を表しているのだろうかと思覚する程だった。

父さんは私の事が嫌いなんだ。私は顔を膝に埋める。ああ、このまま窒息して死んでしまえば良いのに。でも、それは叶わない。そんな事をすれば、きつとお姉ちゃんが悲しむからだ。そう、きつと悲しんでくれるはず。

ああ、どうして私はいつも迷惑ばかりかけてしまうのだろうか？どうして生まれてきてしまったのだろうか？私が生まれて来なければきつと、父さんも母さんも、そしてお姉ちゃんも幸せに暮らせていただろうに。

父さんはロシア人で、母さんはイングラント人だ。二人は合衆国で運命的に出会い、恋愛をし、結婚をし、お姉ちゃんを授かった。8年が経って、母さんは私を産むと間もなく、静かに息を引き取った。元々母さんは体が弱かったのよ、というのがお姉ちゃんの言い分だ。けれど父さんは違う。「お前が母さんを殺したんだ！お前が……！」目を閉じればいつだって、その声が私の頭の中を駆け巡る。

私が母さんを殺したんだ。私は、生まれてきちゃいけない子供だったんだ。

7才になった私は、まだのうのと生きている。私が生きているのは、お姉ちゃんを悲しませたくない、ただそれだけのためだ。(本当にそうだろうか？意外と、私が死ねば父さんもお姉ちゃんもスツキリするのではないか？いや、むしろそれが正しいのだろう)

「ああ、」

私は顔を上げて溜め息を吐く。月光が眩しくて瞼を狭めると、何か生暖かい物が頬を伝って落ち、厚手のスカートを少しだけ濡らす。

プロローグ（２）

私はお姉ちゃんに育てられた。それも当然の話で、愛する妻を殺した人間の世話など誰がするだろうか？お姉ちゃんも母親を私に殺された訳だが、お姉ちゃんは父さんよりもずっと強くて、母親殺しの私の世話を、文句一つ言わずにしてくれた。

お姉ちゃんは今年１５才になる。学校には二人とも行っていない。その余裕が無いのだ。父さんは私が生まれた時から（つまり母さんが死んでから）ずっとウォトカをあおっているばかりで、数年前に貯金は底を付き、お姉ちゃんは日雇いの仕事を探す日々だ。

それで、私は何をしているのかというと、何もしていない。生まれた事を後悔しているだけだ。ただ時たま、特に父さんが外に飲みに行ったりして居ないときなどに、ピアノを弾いている。それが出来ないときには、家にある本などを読んでいる。

余りある時間を使い最近読み終えた本は、「不思議の国のアリス」だ。彼女は好奇心旺盛で、明るくて、可愛らしくて、まるで私と正反対であり、私の惨めさがより際立って、むしろ面白かった。母さん、私にアリスと名付けてくれて、ありがとう。こんなに楽しい事はありません。

…私は何をしているのだろうか？いったい何の為に生きているのだろうか？周囲に不快をばら撒き、この寒いロシアの地で閉じこもっているばかりでは無いか。私に生きている意味なんて、果たしてあるのだろうか？

プロローグ(3)

誕生日は楽しい日では無い。その日は母さんの命日でもあるからだ。通常、非誕生日は1年365日のうちに364日ある。どうしても、毎日では無いのだろうか？どうして1年に必ず1回、私の誕生日がやってくるのだ？

今年の9月5日は特に最悪だった。父さんが暴れて、割れた瓶でお姉ちゃんが怪我をしてしまったのだ。それを見た父さんは不快そうに私を一瞥し、「胸糞悪い」と言い捨て乱暴にドアを開け、飲み直しに行った。私が居なければ起こり得なかった事象だ。何もかも悪いのは私だ。アメリカに居た頃のお姉ちゃんたち家族は、きつと幸せに暮らしていたのだろう。私が生まれてくるまでは、皆がずっと笑顔で居られたのだろう。

「そんな事無いよ、アリス。」

優しいお姉ちゃんは、私をいつも慰めてくれる。

「お姉ちゃんは、私を赦してくれるの？」

お姉ちゃんは首を横に振る。

「ううん、許すとか、許さないとか：それじゃあまるで、アリスが悪い事をしたみたいじゃない。」

私は強く抱きしめられる。お姉ちゃんの手のひらから、新鮮な血の匂いが漂う。

「生き物が生まれてくることに、ひとかけらも罪なんて無いんだから。」

(ああ、それでは、どうして私はこんなにも生きるのが苦しいのでしょうか？もしも神様が居るならば教えて欲しい、この私がどうして生きるのかを)

プロローグ(4)

父さんはその日出て行ったきり、帰って来なかった。お姉ちゃんが18歳になり、アメリカとロシア、どちらかの国籍を選ぶ時になっても、父さんは帰ってこなかった。そこで、お姉ちゃんはアメリカ人になる事を選んだ。その頃には父さんのウォトカによる散財も無くなっていたお陰で、二人でアメリカに飛べるくらいの貯金は溜まっていたのだ。

それで、私たち姉妹はアメリカに逃げた。何度も住む場所を転々としながら、お姉ちゃんは相変わらず簡単な仕事を探しては、毎日を食べていく為に働いていた。その傍ら、お姉ちゃんは警察官になる為の勉強をしていた。なぜ警察官なのかは分からない。でも私は、お姉ちゃんにはぴったりの仕事だと思った。きっとそういう事なのだろう。

合衆国に越してから2年、お姉ちゃんはボストン市警に職を得た。それと同時に、今も住んでいる賃貸に引っ越した。お姉ちゃんは優しく、わざわざ私の為にピアノのある物件を探してくれた。その後お姉ちゃんは才能を認められて刑事さんになった。

それから何年か過ぎて、お姉ちゃんは23歳、私は15歳になった。それでいつも思うのは、私はアメリカに来て何か変わったのだろうか、という事だ。

…何も変わってない。何一つ変わっていない。お姉ちゃんに守られている事を良い事に、ロシアでもアメリカでもやっている事は同じ、家に引き籠ってピアノを弾き、物哀しくなればお姉ちゃんに甘え、けして戻らない日々を、無為に過ごしている。

ああ、―虚しい。

1. アリスと出会い（1）

よく晴れた秋の日だった。穏やかな風に紅葉が揺れていて、太陽はじつとして動かず、午後の人々を優しく照らし出している。きつとそんな緩やかな日だったから、お姉ちゃんは、普段家から一步も出ない私に、「一緒に散歩に行こうよ」と誘ってくれたのだ。いや、普段から誘ってくれてはいる。私は大抵それを無下にも断るのだ。

「家に居る方が好きだから」と。

でも：それでも今朝は本当によく晴れていて、私にさえ少しだけ外に出てみようかなと感じさせる程であり、それで、私は珍しく外に出ることに決めたのだ。

けれど、それは間違いだった。お姉ちゃんは私を退屈させないためであろう、話しかけてくれたり、あの喫茶店に入ろうか？などと誘っていてくれたりして、それは良かったのだ。けれども、全て私が歩き慣れていないせいで、多くの人が行き交う広い通り（もしかするとショッピングモールだったのかもしれない）で、私はお姉ちゃんととはぐれてしまったのだ。周りは見知らぬ人ばかりで、見慣れない場所で、一人ぼっちだ。もうこの国に来て5年になるのに、私はこの街の道一つさえ覚えていなかった。さらに悪いことに、私は英語があまり話せない。私は泣きなくなった。心細い事や不安に対してではなく、いつも優しくしてくれるお姉ちゃんに、迷惑をかける心配させてしまっていることに。

ふと、人にぶつかる。私はきゅんと短く声を上げてしまう。あ、ああ。また私は、私は、人様に迷惑をかけてしまった！私が何か厄介事を起こす度に1ルーブル貯金していったら、いったいパンがいくつ買えるのだ？私は迷惑ばかり、面倒ばかり。私は普段のように、父さんに怒鳴られるのを待った。

>i8700—830<

だが、その人は父さんのように怒鳴りはしなかった。それどころ

か、申し訳なさそうに私に何か言っている。私に、すまなそうに？
「ごめんね、ちょっと考え事してて：大丈夫？」

たぶん、そういった主旨の事を言っているのだと思う。（さっきも言ったように、私は英語が分からない）：そんな、悪いのは、いつも私のほうなのに！

「ス、スミマセン。ゴメンナサイ：」

とにかく私は謝りたくて、謝りたくて、謝りたかった。謝って、迷惑をかけてしまった恥と、謝罪を受けるなどという分不相応な事を、早く忘れてしまいたかった。

「あれっ」

その女性が言う。私はビクツとして、目を見開く。

「その、泣いてるね。どうしたの？」

予想外の質問に、私は驚いた。喉が、息が詰まる。

「アノ、エツト：」

うまく答えられない。迷子は英語では何と言うんだろう。助けてくださいは何だろう。生きていてごめんなさいは、どう言うんだろう。そう考えているうちにどんどん胸が苦しくなってきた、息が荒くなって、しゃっくりあげ、熱い涙が流れて、私は両手で顔を覆った。

私が手で顔を覆って泣いているといつも、お姉ちゃんが慰めてくれた。父さんの言う事は気にしちゃ駄目よ。アリスは私の、たった一人の、大切な妹なんだから：と。

でも今、目の前に居るのはお姉ちゃんではない。会った事のない母さんでも、ましてや父さんですらない。何の繋がりもない、ただの善良な白人女性だ。家族に留まらず、私は他人にも迷惑をかけてしまうんだ。目の前の女性は、私の様子を見て固まってしまっている。太陽の光が涙に眩しくて、目が開けられない。

（ほらアリス、今までずっと、何度も言われてきた事でしょう？）
私なんて、――生まれて来なければ、良かったんだ！

アリスと出会い（2）

泣いているときは、案外冷静になるものだ。たぶん涙というものが、興奮した感情の塊と一緒に流れてくれるからだろうと、私は感じていた。泣きながら、この女性も私なんかには面倒をかけてしまつて、不幸だなあと思う。いやそもそも、私が出かけなければ良かったのか。ああ。

…消えてしまえば良いのに。私が居なければきっと、世界はみんな幸せに回っていくのに。ああ。

ああ。

その女性は、「参ったなあ…」と小さく呟き、そしてふと思いついたように、「ちよつと待ってて」と言うと、どこかに走り去って行ってしまった。私を取り巻く周囲の視線が痛い。でも、それで良いんだ。私はどうせ惨めなんだから。それが分相応という物なんだから。私は、あの女性が戻って来なければいいとすら思った。それがお互いの為であると信じた。

しかしながら女性は生真面目な性格なのであろう、息を切らしながら戻ってくるのが見えた。

…さっきから女性と言っているが、実のところ、声を聞くまで彼女が男性ではないかと私は勘違いしていた。というのも、彼女の外見に何一つ女性的な事物や仕草が見いだせなかったからだ。化粧はしていないし、服装もパーカーにジーンズ、スニーカーといった具合だ。唯一、無造作な長髪が彼女を少なからず女性らしく思わせていた。透き通るような碧い目をしていて、髪は黒に近い茶髪だ。

「ほら、これ！」

そう言つて小さな袋を私に差し出す。彼女は背の低い私にもよく見えるように少し屈んで、中身を開けて見せてくれる。それは、市松模様のクッキーだった。まだ少し、温かそうにすら見えた。

「これでも食べて、元気出して。ね？」

実のところ、わたしは今朝砂糖が2杯入ったダーズリン茶しか口にしておらず、こう言ってしまうのも恥ずかしいのだけれど、つまり、お腹が空いていたわけだ。だから、野良猫の気を惹きたいときに何か食べ物を差し出すように、この女性が私に美味しそうに焼けているクッキーを見せた：というのは、そういう意味で非常に正解であつたように思える。

空腹の私は（少しためらいがちではあつたものの）クッキーをひとつ手に取る。女性も同じように手に取り、口に入れる。私はそれに倣って口を含む。紅茶が欲しくなるような味だな、などと私は思った。少し、世界がスツキリとして見える。

「ねえ、」

「名前は、何て言うの？」

女性が私に尋ねる。私は初めナマエという単語の意味が分からなかった。私が困っていると、それを察してか、

「俺の名前はハンナ。ハンナ・ホセア。」

ハンナさんはジェスチャーを交えて名乗ってくれた。ナマエとは、名前の事か。

「あなたは？あなたのお名前、何て言うのかな？」

名前：。私の名前は――

「アリス、デス。私ノ名前ハ、アリスデス。」

アリスと出会い(3)

ふうん、アリスちゃんねえ…と、ハンナさんは私の顔を、鏡でも覗き込むように見ながら言った。そのようにされてしまうと、自分がアリスなのか、それともメアリ・アンなのか、私は自信がなくなってしまった。

「アリスちゃんは、迷子になっちゃったの？」
マイゴ？

「迷子っていうのは…どこへ行けばいいか分からないとか、ここがどこだか分からないとか…そんな感じ。」

「…ハイ。道、分カラナイデス。」

私は普段、お姉ちゃんとロシア語で会話をしている。そのために、あまりよく理解していない英語を話そうとすると、このように酷くロシア語訛りの、片言の英語になってしまう。お姉ちゃんは母さんの影響もあってか、綺麗なイギリス英語を話すのだけど。

「アリスちゃんは、誰か家族の人とか居ない？お父さんとか、お母さんとか。」

ハンナさんは、私の片言英語から察してか、なるたけ簡単な英語で話してくれているように思えた。

「お姉チャンガ居マス。エト…警察官デス。」

「お姉さんの名前は？」

「イリス・イワノヴナ・ソーンツェワ。」

ソーンツェワというのはソーンツェフという苗字の女性形で、ロシア語で太陽という意味だ。そう、まさにお姉ちゃんは私の太陽だ。いつも私を照らしてくれて、そして守ってくれる。今までもそうだったし、これからもきっと。

「イリス・イワノヴナ・ソーンツェワ、か…ちょっと待ってね。俺、警察に友達居るから、電話して聞いてみるよ。」

ハンナさんは携帯電話を取り出して（私も携帯電話自体は知って

いる。ただ必要が薄いので持っていなかったのだ。私は今になってそれを後悔し始めた）、電話をかけた。私はそれをじっと見守った。私にできるのは、精々そのくらいの事だから。

「もしもし、ギル？ハンナだけど。今話せる？」

私が聞き取れたのは初めのその文くらいなもので、ハンナさんはネイティヴ・スピーカーが本来話す速度と語彙、スラングで話しているのだろう、私は彼女の言葉をほとんど理解する事が出来なかった。

（一体、何を話しているんだろう…）

ぼんやりしていた私はハツとした。今更だが、私は生まれて初めて、赤の他人から優しくされ、愛を受けている事に気が付いた。

アリスと出会い（４）

「アリスちゃん？お姉さん、ちょうど俺の友達と一緒に職場だったみたい。場所教えたから、今から急いで迎えに走ってくるってよ。」ハンナさんはニヤリと、チェシヤ猫みたいに笑った。私は（もちろんお姉ちゃんと連絡がついたという安堵感もあったけれど）それどころでは無かった。

この優しいハンナさんは、ひよつとすると、私の初めての友達になってくれるかもしれない。そんな邪な考えが頭をよぎったからだ。同時に、ここで別れてしまえばもう、二度とハンナさんに会えないのではないかという不安も。

私には、アリス・イワノヴナ・ソーンツェワには、友達が居ない。私の人生はお姉ちゃん、本、そしてピアノくらいなものだ。それ以外は許されなかった。私は幸せになってはいけないんだという意識が、常にあった。

でも―この優しい女性となら、私は友達になれるかもしれない。そういえば、どこことなくお姉ちゃんに似ているとさえ感じる。

（私は―私はどうすればいいんだろう？何をしたらいいんだろう？）
そうこうしているうちに、お姉ちゃんが駆けてくるのが見えた。焦っていると、存外時間は早く過ぎるものだ。

「アリス！」

お姉ちゃんはそう叫んで私を抱きしめた。ああ、お姉ちゃん、もちろん嬉しいよ。だけど、私はどうしたらいいのかわからなくて、ハンナさんとも別れたくなくて、その、つまり、私は…

お姉ちゃんとハンナさんはほとんど事務的に挨拶を交わして、そしてハンナさんは背を向けた。私はその時ほとんど反射的に、彼女の左手を掴んだ。ハンナさんは驚きからか目を見開いた。

「ま、ま、待ッテクダサイ。ソノ…チャントオ礼ガ言イタクテ…」
黒い手袋越しの手が温かい。私はじっとハンナさんの手を見つめて

いたが、ふとハンナさんの顔を見上げて、

「ありがとうございます。」

ロシア語でお礼を言うのがより私の気持ちに沿っていると感じて、
”Большое спасибо.” そう言った。するとハンナさんも（当然私の知らない）東洋の神秘的な響きで、

「どういたしまして。」

と発音した。意味は理解できなかったが、私はその不思議な音に心が揺れた。ハンナさんはまたニヤリと笑って、私の手から離れる。お姉ちゃんは私の両肩に手を置いている。温かくて、離れられない手だ。私はハンナさんにもっと何か言おうとしたが、彼女はもう既に数歩を歩き出している。：引き止めるんだ。何か言わなきゃ、何かしなきゃ！

でも今の私にはそれ以上彼女を引き止めるだけの勇気が無かった。（これで、これで本当にお終いな？ 私はもう、ハンナさんに会えないの？）

私がまた泣きだしそうになっていると、ハンナさんは突然こちらに向き直って、思い出したように、そして別段何でもない風に、こう言った。

「またね、アリスちゃん。」

2. アリスとピアノ（1）

昔から月明かりが好きだった。その下で本を読むことも出来るし、何より夜は父さんが静かだった。私に太陽など勿体ない。ギリシア神話のイカロスは太陽に近づきすぎて蠟の翼を溶かしてしまったという。私に昼は似合わない。そう、だから、月の事を描いたピアノの曲が好きなのだ。特に、ドビュッシーの『月の光』。寂しいのに明るく照らしてくれている、そんな感じだ。

ピアノは私のほとんど唯一の趣味であり、抛り所でもあった。私にはとてもそうは思えないのだけど―お姉ちゃんは私がピアノを弾く度、「上手だよ」と褒めてくれたもので、すると、私という小さな存在がほんの短い間だけでも認められたような感じがして、嬉しかったのだ。父さんがどこからか戻ってくるまでは。父さんがまだ居た頃のロシアの地では、私は外出をほとんど許されなかった。「母さんを殺したお前が、能天気にな外をうろついていると考えるだけで虫唾が走るんだ」父さんはよくそう言ったものだ。

父さんが家に居る間にピアノを弾くと当然ながら五月蠅がるので、その間私は本を読んでいた。本を読んでいる間は楽しかった（それを表情に出すとやはり父さんは煙たがるので、私は極力笑わないようにする術を身に付けた）。本当にたくさんの本を読んだけれど、よく覚えているのは、奪われた時間を取り戻す女の子の話に、読んでいた本の中に入り込んでしまう男の子の話。あとはなんだっけ：朝目覚めると虫になってしまった青年の話とか、恋人同士が子供たちを静かに殺していく絵本、それから、『不思議の国のアリス』。本を読んでいる間は、その中に逃げ込む事が出来た。物語の中には友達が居たのだ。そうまるで、ウサギの穴に入り込んだアリスのよう。：でも、現実には私は物語の中に居る訳ではない。私はあくまでアリス・イワノヴナ・ソーンツェワであって、アリス・リデルではない。彼らは私を助けてはくれないのだ。その事は、痛いほど理

解していた。

アリスとピアノ(2)

ハンナさんにもう一度会いたいという気持ちから、あれから何度か、私は外に出ていた。といっても、家の周りや付近をうろつく程度だけれど、それでもお姉ちゃんは嬉しそうだった。

(「またね」と、ハンナさんは言ってくれた。それってきつと、きつとまた会えるって事だよね?)

私の日課に、新しく散歩が加わった。目的はハンナさんともう一度会うこと。こうして居れば、ひよつとするとハンナさんに会えるかもしれない。少なくとも、家の中に閉じこもっているよりは、可能性がある。ハンナさんは、私を照らし出してくれた。私に、「友達が出来るかもしれない」という、小さな希望を与えてくれた。友達、友達、私は友達が欲しい。：友達ってどうすれば出来るのか、よく分からないのだけど。

夕陽が沈み暗くなってきて今日はもう会えないかな、と何となく悟ると、私は家に戻って、お姉ちゃんの帰りを待つ。家の前を人が通るのは珍しかったので、私は家の中から、人が通る度に、ハンナさんの影を探した。

「ただいまぁ。ごめんね、遅くなっちゃって。」

お姉ちゃんが仕事から帰ると、まず私は二人分の紅茶を淹れる。お姉ちゃんはミルク、私はストレートだ。角砂糖は二つ。戸棚から何かクッキーなどを取り出して、二人だけのティー・タイムを過ごす。そもそも私が外出を嫌っていたので、お茶の席での話の内容も少なかったのだが、最近は少し、話題が増えた。

「今日は、どうだった? ハンナさんに会えた?」

私は首を振る。お姉ちゃんはちよつと残念そうにしてくれる。

「でも：でも、きつとまた会えるよね? そうだね、お姉ちゃん?」
お姉ちゃんは机の上をしみじみと眺めながら、言った。

「うん：うん、そうよ、大丈夫、きつとまたハンナさんに会えるわ

…」

（お姉ちゃんは私を気遣って、そう言ってくれるのだろう。お姉ちゃん
は私の事をよく分かってくれているし、私もまたお姉ちゃんの
事をよく分かっているつもりだから。やっぱり私が明るくなれば、
お姉ちゃんも少しは気が楽になるのだろうけど…。）

アリスとピアノ(3)

お茶の後は二人で一緒に簡単な料理を作って食べる。お姉ちゃんは料理も上手だし、格好良い警察官だし、それに、母さんに似て美人だ。

「美人だなんて：確かによく言われるけど、私はそう思わないなあ。だって、化粧をした事すらないのよ？女として自分を磨こうとしない訳。それなのに皆、モデルだの女優だの散々私の事囃し立てるのよ。ちよっと、言いすぎよね。」

お姉ちゃんは、私と同じであまり褒められる事に慣れていない。それでも、私はお姉ちゃんをとて素敵な女性だと思う。優しくて、美人で、優秀で：。ひとつだけ欠点があるとすれば、それは私の存在だろう。

軽い夕飯をとった後はゆったりと過ごす。私はピアノを弾いたり読書をしたり、そしてお姉ちゃんは拳銃の整備をしたりする。昔ロシアに居た頃、お姉ちゃんは吹雪の日に倒れたところを偶然、年長いた猟師さんに助けられた。当時仕事が無くて困り果てていたお姉ちゃんは、その旨や父が失踪したなどの身の上を話してみると、なんとその猟師さんはお姉ちゃんをそこで働かせてもいい、と言ったそう。

「俺も歳だしな。若い奴に伝えたい事もいくつかあるもんだ。」
猟師さんはそうも言ったそう。お姉ちゃんは彼の事を師匠と呼んだ。一時期お姉ちゃんは猟師としてお金を得ていたのだ。その頃から仕事柄よく銃に触れるようになって、お姉ちゃんにとって何となく身近な存在になったようだ。それは今でも変わらない。私にとってのそれは、つまりピアノだった。常に私の傍にあって、辛い時でも、少し幸せな時でも、私と共にあった。ピアノは、私の人生の一部だ。

「雨が降ってる」

お姉ちゃんが呟いた。そしてほとんど独り言のように続ける。

「雨が降っている間でも、太陽も、そして月も、ちゃんと雲の上で輝いてるのよねえ…」

3. アリスと約束(1)

私は相変わらず外に出ていた。半分意地で、諦めきれずに。我ながらなかなか未練がましい性格だと思う。私は、自分で思っている以上に頑固なのかもしれない。

外では特に私を気にするような人は居なかった。(これは本当に意外だった事で、私が外を出歩くようになってから初めて知ったのだけれど、本当に誰も私の事なんか気にも留めないのだ。これが嬉しい誤算であって、というのも私はいつも父さんに憎まれて育ったから、赤の他人でも私のせいで不快を感じてしまうのが当然と信じていたからだ。)そして同じく、ハンナさんも居なかった。それは、それまでの経験から充分に予測できた事だけれど。

はぁ、と溜息を吐く。秋の風がスカートを揺らして、雨の匂いにする。少し、歩き疲れた。するとたまたま公園が近くにあって、私はそのベンチに座る。目の前の子供たちは無邪気に遊んでいて、それを見守る母親たちの眼差しは、温かくて優しそうだった。

(…お姉ちゃんも昔、こんな風に公園で遊んだりとか、したのかな…)

それを破壊したのは私だ。私が生まれたからだ。…ああ、この流れはいけない。また家に帰りたくなってしまう。何か、何か気を紛らわさなくては。

…そうだ。休むついでに、図書館か本屋さんでなにか簡単な英語の本を読めば、少しは英語の勉強にもなるかもしれない。私らしくない良い思い付きだ。私は立ち上がって、再び歩き始めた。

アリスと約束（2）

大量の本は棚という棚に収納されていて、静かに眠っていた。公園から少し歩いたところにちょうど図書館があつて、私は中を覗いた。人はほとんど居なくて、司書さんも暇そうにしているふうだった。私はひっそりとドアを開けて、中に入った。

まず初めに目に付いたのは、絵本だった。それから新書。私は特に探している本がある訳でも無いので、すると、帽子屋^{ハッター}という名前が目に残った。私は歩みを戻して、本に手をやる。

「レグニー・N・ハッター著、ええと…、 “A. I. チャンネルは…”？」

「ねえねえ、ひよつとしてその本、今まさに読まんとするところ？」
私は知らない声に話しかけられて、跳び上がる。とても澄んでいて、明るい声だ。

「ア、エ、アノ…？ド、ドナタ、デスカ？」

「あ、突然ごめんね。私はクレア。カナダ人よ。大学生。…いやね、貴女が今まさに手に取ろうとしたこの本、実はね、私のお兄ちゃんが書いた本なのよ！それで、ああ、本当に手に取ってくれる人って居るんだなあって、今凄く感動したの。分かるでしょ、この気持ち。」

「エ、ア、ソノ…ハイ。」

ほとんど何を言っているのか分からないままに返事をしてしまった。言葉がとめどなく溢れてくるのがまるで、『赤毛のアン』みたいなだな、などと私は思った。

「本当、突然ごめんなさいね。…あ、それと話しかけついでに個人的な興味でひとつ聞きたいのだけど、あなたどこの国の出身？独特の訛りがあるわよね？あ、別に馬鹿にしているとかそういうんじゃない、ただ単に純粋に、興味があるだけなのよ。私、言語とか文化とかに凄く興味関心があるから。」

「ア、エェト：ろしあ、デス。」

辛うじて私がそう言っていると、クレアさんは凄く嬉しそうな顔をして、流暢なロシア語で話し始めた。

「やっぱり！そうじゃないかなって思ってたのよ、ロシアかウクライナ辺りじゃないかなあって……。あ、私、ロシア語分かるのよ。ていうかヨーロッパの言葉とか、アジア系の有名どころならほとんど話せるけれど。なんでかっていうとそれはもう、本とか映画とか、そういうのって原語で、オリジナルのまままで楽しみたいじゃない？ね？」

私はぽかんと口を開けながら啞然として、

（よく分からないけど、ともかく無害そうな人だ。）
と、思った。

「それで、この本ね。私の一番好きなところ。：『きっと僕たちはちょうど、磁石のN極とS極との関係なんだ。全く違う境遇・性質・性格なのに、何故か惹かれ合う。きっと恋つてのも、そういうことなんだ。自分に無い物を他人に求めようとする。』：詩的な台詞よねえ。まあ実際に恋愛とかした事無いんだけどね、うちのお兄ちゃん。」

「あ、その、すみません：話がよく、掴めないのですけれど：」
そもそも何で私に話しかけたりしたのだろう。その、お兄さんの本を手にとったから？

「さっき言った通り、単にね、ああ、お兄ちゃんの本を手取る人が居るんだなあって思っただけで：あ、そういえば、未だ名前聞いて無かったわね。よかったら教えてくれる？教えてくれなかったら私が勝手に名前付けて呼んじゃう。ねえ、もしかしてあなた、リリーって名前じゃない？何だかそんな感じがする。」

名前を知らない相手でも、会話って出来るものなんだな。（というか、リリーは母さんのニックネームだ。）私は特にこの人に悪意とかその他を感じなかったので、自分の名前を言った。

「私は、アリスといいます。えっと：15歳です。」

「アリスちゃん？あなたアリスちゃんっていうの？…へえ、偶然つてあるものねえ。」

私は首を傾げた。クレアさんは続けた。

「いやね、私の友達のね、ハンナっていうんだけど、アリスちゃんって迷子の話を聞いたのね、最近。そうそう、その子も丁度貴女みたいで背が低くて、白髪を二つ結びにしてて、それでロシア系、で…」

アリスと約束(3)

「…あなたがアリスちゃん?!」

クレアさんが叫ぶと、司書さんがちらりと私たちを睨んだ。クレアさんも少しばつが悪そうな表情をした。

「あ、ごめんなさいね。ちょっと感動しちゃって。一回外出しましょうか。」

「い、いいえ、構わないです。そ…それよりも、ハンナさんとお知り合いなんですか?!」

クレアさんはきょとんとして私を見た。

「知ってるも何も…幼馴染というか、まあ親友かな。小さい頃から仲良くやってるの。なんか色々あって親近感湧いたっていうかね。まあうん。それで、ハンナがどうかしたの?」

何という巡り合わせだろう。たまたま思い付いて図書館に立ち寄って、たまたまハンナさんの親友に出会うなんて。私は堪らず聞いた。

「あ、あの、私、ハンナさんに会いたいんです。クレアさん、居場所をご存じではありますか?」

「んー、この時間だとまだパン屋で仕事してると思うわ。たぶんね。ほら、いつも飄々としてて、掴み所が無い子だから、居場所もはっきり分からないの。突然居なくなったり、かと思えばいつの間にかそこに戻ってきたりする。神出鬼没なのよ、ハンナは。」

クレアさんは寂しそうな笑顔でそう言った。が、どうやら私が泣き出しそうな表情になっているのを見てか、聖母マリアのように微笑んだ。

「ハンナに会いたいよね?大丈夫、任せて。今から一緒にパン屋に行きましょ?」

アリスと約束（4）

「あ、あの、待ってください、クレアさん」

クレアさんが私の話も聞かずにずんずんと歩を進めるものだから、私は焦った。だって、私は英語が分からない。ハンナさんに会っても、きっと何も話せない。迷惑を、かけるだけ。私は必死になって叫んだ。

「あの、その、話してなかったんですけれど、…わ、私、英語が分からないんです！だから、ハンナさんに会っても何も話せない…むぎゅ」

急に立ち止まったクレアさんがにっこりと、満面の笑みを浮かべている。

「ごめんね。もう、着いちゃったの。」

え？と思うと、もう店の中が見える所に私は立っている。ハンナさんがガラスの向こうに居る。と、こちらに気付いて、笑って手を振ってくれる。顔が赤くなってくるのが分かる。そして思わず、走り出してしまう。

ああ、どうして、私はこんなにも引込み思案なのだろう。胸はまだ、ドキドキしている。流れている血液が、自分のものではない感じた。興奮するというのは、こういう感覚なのだろうか。少し、息が苦しい。

（だって、そもそも私の―エゴでしょう？ハンナさんと友達になりたいという願望は。大体、ハンナさんは私にではなく、クレアさんに手を振ったのかも知れないじゃない。この、自意識過剰。自意識過剰。）

いつもと同じ自己嫌悪が襲う。そうすると、不思議と気分が落ち着いてくる。慣れたものだ。私はようやく立ち止まる。

そして冷静になった頭で、気付く。私は今さっき「人の顔を見て逃げ出す」という、大変な失礼をしてしまったのではないか。どう

しょう。クレアさんの、そしてハンナさんの機嫌を、ハンブテイダンブテイ割れた卵なま
でに壊してしまったのではないだろうか。

アリスと約束(5)

ああ。

ああ。きつともう駄目だ。完膚なきまでに、だ。王様の家来を皆んな集めたって、割れた卵は元には戻らない。ハンナさんとはもう友達にならない。

私は、私はどうしていつも、失敗ばかりしてしまのだろう。ああもう、思い出したくない、嫌な思い出が蘇ってきた。：父さんは、私のせいで機嫌を損ねたことは、いつまでも覚えていた。私がおねしょをしたこと。転んで服を、全身を泥だらけにしたこと。喋ること。ピアノを弾く事。皿を割ったこと。外に出たこと。そう、私が外に出るのを彼は嫌った。

「お前みたいな奴が、のうのうと生きてやがるのが許せないんだ」そうだ。だから私は、外にも出ることもせず、誰の機嫌も損ねないよう、細心の注意を払って生きてきたんだ。何事も起こさないように。私自身、何も起きなければいいと思っていた。なのに、ハンナさんにまた会いたいなって、身の程を知らない願いをするものだから。

ああ、また涙。私は声を押し殺して泣く。：父さんに怒鳴られた時はいつも、声を出さないようにしていた。きつとまた、その事で「うるせえ」と怒鳴られるだろうと、予想が付いていたから。だから今でも、話すときに言葉を飲み込んでしまう。本当に、私なんかが話をしていいのだろうか、と。私は泣く事しかできない。泣く事でしか自分を表現できない、言葉を知らない赤子同然だ。

(私は弱い、愚かで矮小な、惨めな人間なんです、神様。どうか私に救いの手を、救済を。)

私は顔を上げて、手で涙を拭う。

目の前にハンナさんが居る。

「アリスちゃん？どうしたの、大丈夫？
驚いて、嬉しくて、声も出なかった。」

アリスと約束（6）

「びっくりしたよ。また会ったなあって思ったら、真っ赤になって走っていつちやうんだもん。」

ハンナさんは笑いながらそう言った。本当に、心底楽しそうに笑う人だ。

「ゴ、ゴ、ゴメンナサイ…」

そして私は今一番の気掛かりを聞いた。

「クレアサン、怒ッテナイデスカ…?」

「あはは、大丈夫だよ。全然怒ってなんかいないよ。余程の事が無い限り、クレアは怒らないもの。あいつはさ、—ちよつと語弊があるかも知れど—何事にも寛容だから。」

何か、夢みたいにフワフワしている。何となく言葉も分かってしまふし、そう、夢の中だと不思議と外国語が分かったりする。それにこの、私がハンナさんと並んで歩いているという、信じられない状況。何だか、現実味が薄い。

「アノ、コレハ、ヒョットシテ、夢デスカ?」

ついそう言ってしまったら、ハンナさんが私の頬をぎゅうつとつねった。すごく痛かった。私は痛イデスと言った。

「痛いでしょー、でも目が覚めないでしょー? ってことは現実なの。俺は紛れも無くここに居る訳。ハンナ・ホセアは、こうやって馬鹿やりながらも、ちゃあんと生きてるんですよ。」

ハンナさんはいたずらっぽく、笑ってそう言った。私はつねられたのに、ちよつと嬉しかった。ハンナさんと、また会えたという喜びで。

「ハンナサン、オ仕事ノハウハ、大丈夫デスカ?」

ふと、私は少し不安になって聞いた。抜け出してきたても大丈夫だったのだろうか。

「ん? いいのいいの。長年の友達の所だから。俺の性格もよく分か

ってるし、そもそも俺が居なくても、あんまり困らないからあの店。」

トモダチ…。

「アリスちゃんこそ、何か用事とかあったの？」

この頃はずつとハンナさんと会いたくて、毎日日が暮れるまでずつと探してましたとは、流石に言えない。あんまりしつこいというのは、嫌われてしまう事かも知れないし…。

「エ、エト…散歩、シテマシタ。」

「ふうん。じゃあ今から帰る所？」

「エ…ハイ。ソウデス。」

ともかくハンナさんとも会えたし、普段働いているというパン屋さんも知る事が出来、私の目的はとりあえず満たされたので、名残惜しい気もしたけど、これ以上ハンナさんに迷惑をかけるのも少し…
と思っ、そう答えた。それなのに、

「へえ。じゃあアリスちゃんの家以案内してよ。ちょっと行ってみ
たいからさ。」

と、ハンナさんは言った。

「…ハイ？」

多分私は、今までの人生の中で最も『信じられない』、といった表情をしていたと思う。

アリスと約束（7）

ああ。まさかこんな事になるなんて。もっとちゃんと家を掃除しておけばよかった。というか、もっと万全の状態でお迎えすべきだったのに。ともかく私はお湯を沸かして、乱雑としている本を適当にまとめて、あとはもう、ええと、何だろう。

「アリスちゃん、もう入っていいー？」

と言いつつ、ハンナさんは私の返事も待たずに家に入って来てしまった。ハンナさんは一瞬靴を脱ぎかけて、履き直す。

「へえ、なんか良い所だね。綺麗だし、それに素朴な感じで。」

あああああ。私の心臓が信じられない速度で高鳴っている。これこそ、夢では？ 私はハンナさんに見えないように頬をつねった。やはり痛い。

「ハ：アノ、ハンナサン！アノ、エト、何カ、何カ飲ミマスカ？！」

「あ、うん。ありがとう。じゃあよかったら、コーヒーくれる？」

私は台所に駆け込んだ。そして一息つく。ええと、コーヒーは確か買ってあったはず。お姉ちゃんも私も飲まないけれど…少し前にお姉ちゃんが、ちょっと飲んでみようかと試しに買って、一二杯分だけ使ったのがあったはず。私は飲まなかったけど…。

「あった！」

思わず叫んだ。えっと、えっと、淹れ方。説明書き。…英語?!当然だ、米国で買ったのだから。私の為にロシア語で書いてくれるはずもない。…え、えと、ど、どうしよう？

「どうかしたの、アリスちゃん？」

ビックリした。ハンナさんが後ろに立っていたのだ。たぶん、さっきの叫び声が原因だろう。

私は真っ赤になりながら、聞いた。

「アノ：ハンナサン、コーヒーッテ、ドウヤッテ淹レルンデスカ…？」

アリスと約束（8）

恥ずかしい。普段は紅茶しか飲まないから、コーヒーの淹れ方など分かるはずが無かった。のに、見栄を張って。私は、なんて人間だろう。ハンナさんに、無知な、無教養の、馬鹿な子供と言う印象を与えていないだろうか。ううう。

「アリスちゃん、クッキー食べる？」

ハンナさんはお姉ちゃんの椅子に座って、コーヒーの湯気をくゆらせながら、あの日のクッキーを再び取り出して、あの時と同じように、私に差し出した。

「ア…、ハイ、イタダキマス。」

やはり、クッキーはまだ温かった。

「…美味シイデス。」

「本当？良かった、さっき店で作ったんだけどね…実は味見してなかったからさ。えへへ。」

「…エ？コノくつきー、売り物じゃ無…エツト、ソノ…ハンナサン、作ッタデスカ？」

「え、そうだよ？何だと思ったの？」

「…デモ、ダツテ、コンナニ形が良クテ、イイ色ト香りデ、トツテモ甘クテ美味シイノニ…」

「あはは、そうかな？でもなんか褒められてるみたいで、嬉しいな。」

えへへ、とハンナさんはもう一度照れくさそうに笑った。

「はいアリスちゃん、コーヒーどうぞ。」

たぶん照れ隠しに、ハンナさんは彼女のカップを私に差し出す。

「エ…ハ、ハイ。イ、イタダキマス…。」

飲んだ方が、良いのだろうな。断るのも何だし。それに…どんな味がするのか、前々から気になってはいたものの、何となく手を出さないでいたから、いい機会かも知れない。

「アノ、実ハ、こーひーツテ飲ンダコト無クテ…」

「初めてなんだ？…あ、そっか、キッチンに紅茶いっぱい並んでたもんね。ダージリン。」

少し躊躇っていたが、思い切って口に含む。と、瞬時に苦いという衝撃が脳髓に走り、一瞬吐き出してしまいそうになったが、何とか堪えて、飲み下す。

「ニ…、ニニ…、苦イ、凄ク苦イデス！…エ、エ、オ砂糖ハ、アノ、オ砂糖トカハ入レナイデスカ？！」

「あ…ごめん。俺普段、砂糖もミルクも入れないから…」

ハンナさんは本当に呆気に取りられていた顔だった。いわゆる『素』という顔だろうか。

「シ、シ、信ジラレナイデス…！」

私は急いでクツキーを口に放り込む。…あ、でも…コーヒーの苦みとクツキーの甘さとが、ぴったりと調和してる…まるで和音みたいに。

「ア、エト…、デモ、苦クテモ、くつきーニハ合ウカモデス…」

「でしょ？きつと紅茶にも合うよ。…また持ってきてあげよっか？」

アリガトウゴザイマス、と私は言った。ハンナさんはチラリとピアノに目をやった。

「ねえ、さっきから気になってたんだけど…ピアノあるよね？アリスちゃんってピアノ弾くの？」

「エ…？ア、ハイ。少シダケ、デスケド。」

「何か、弾いてみてよ。」

家に在るピアノは、少し古い木製のアップライトだ。よく調整されているふうで、調律もきちんとされているし、私にはこれで充分だ。それに、少し古くてあまり高くない方が、なんとなく親しみが湧く。私は蓋を開けて、鍵盤に指を置く。…何を弾こう？あまりチープでなく、簡単に、つまり上手らしく弾ける曲。と、私はひとつ思い当って、ちよつとだけ息を吸って止める。そして、弾き出す。軽いダンスのようなリズムで、何となく私のイメージだと、犬や猫が、庭

や家の中とかを、そこらじゅうを駆け回っている感じの曲だ。

「あはは、それ『ねこふんじゃった』じゃん。それなら俺でも弾けるよ。」

「『ねこふんじゃった』…？アノ、ソレツテ、ドウイウ意味デスカ？」

分からない言葉…というより、明らかに英語で無い発音に私は少し戸惑って、そう聞いた。

「その曲の名前だよ。猫を踏んじやいましたーって意味。日本だとそう呼ばれてるんだ。アメリカだと、『ノミのワルツ』とか言うみたいだけどね。」

「猫ヲ、デスカ…。エツト、ろしあダト、『犬のワルツ』ツテイイマス。…エエト、デモ、ソノ…」

また私は下らない事を、と思いちよつと戸惑ってしまったけど、でも、思い切って言うてしまう。

「私ハ、猫ノ方が好きデス。」

大真面目に聞いてくれていたハンナさんは、緊張の糸がぷつんと切れたように、微笑む。

「そつかあ、アリスちゃんは猫好きなんだあ？」

「ハイ。オ姉ちゃんは、犬が好きミタイデスケド…デモ、私ハ猫ガ好キナンデス。」

と、ふと私は疑問に思っ、ハンナさんに聞く。

「ハンナサン、エト…ハンナサンハ、ニッポンジン、ナンデスカ？」

「ん、そうだよ。国籍はアメリカだから、正確には日系2世だけだね。」

「デモ、アノ…白人、デスシ、ソレト、エツト、苗字モ…」

私がそう言うと、ハンナさんはちよつとだけ困った風に、

「ホセア、ね。あれは母さんの苗字なんだ。戸籍上俺の本名はハンナ・ハルノ。日本人の父さんは、本当は華^{ハナ}って名付けたつもりらしかったけど。でもまあ、見た目こんなだから、ハナはハンナになるし…ハナ・ハルノ、日系人です…って初対面で言っても絶対信じて

もらえないから、じゃあ混乱させるのもなんだって思って、普段はハンナ・ホセアって名乗ってる。ま、そんだけだよ。」

とだけ、答えた。そしてすぐにピアノに話題を戻して、

「それよりさ、他にも何か弾いてみてよ。」

と、楽しそうに聞いた。

「何カ、デスカ：ム、難シイデス。」

「そうだなあ、アリスちゃんが一番好きな曲とかさ、無いの？」

「ア、エ：ト、どびゅっしーノ、クレール・ド・リュクス『月の光』が一番好きデス。ア、

デモ、ソノ：」

「クレア・デ・ルナ『月の光』かあ！俺も、あの曲大好き。ねえ、弾いてよ弾いてよ。」

「あう：」

観念して私は弾き始める。が、思い入れが強い曲だけに、やっぱり恥ずかしくて、続けられない。まるで、裸体を晒しているかのような気分だ。

「：ヤ、ヤッパリ、無理デス。ソ、ソノ：下手、デスカラ：」

「えー、そんな事ないよー。もっと聞きたいのにー。」

「デモ、ソノ、ジ、自信ガ：」

私がうじうじしていると、ハンナさんは思い付いた顔をして、こう提案した。

「じゃあさ、約束しよ。」

「エ：？」

「いつか絶対、出来れば近いうちに、俺にアリスちゃんのピアノをちゃんと聞かせてよ。もう、すごい練習しまくって、そんで自信付いてから、で良いからさ。」

そう言って、ハンナさんは小指を差し出す。私はよく分からなかったけれども、それに倣う。そしてハンナさんは私と小指を絡げると、リズムよく手を揺らしながら、お経のように歌った。

「ゆーびきーりげんまんっ、うーそつーいたーらはーりせーんぼんのーますっ：ゆーびきった！」

そして、小指を放す。私は頭を捻った。

「：アノ、今ノツテ、ナンデスカ？」

「ん？ああ、約束するときの日本の習慣だよ。もしも約束を破ったら、指を切った上で拳骨一万回、そして針を千本飲ませるぞっていう：」

「エエッ？！ソ、ソンナ：コ、怖イデス：。ソンナノ、デ、出来ナイデス：。」

私が恐怖から泣きそうになると、ハンナさんは大いに笑った。

「あははっ、大丈夫、しないよしない、こんなのはもう誰も意味なんて分らず使ってる事だから。」

と、ふとハンナさんは壁の時計を見て、言った。（腕時計はしておらず、代わりにその左手首には赤と白の紐で編まれた、綺麗な手首飾りが見えた。）

「あ、もうこんな時間。そろそろ行かないと。」

「：時間って、楽しいと早く過ぎちゃうものだよね：」

ハンナさんは、独り言のように呟きながら、席を立った。

「ア：ハンナサン。」

うん？とハンナさんは私を見た。

（：ああ、帽子屋と三月ウサギのお茶会みたいに、永遠に、この時間が続いてくればいいのに：）

私は少し俯きながら、なんとか、言いたいことを言葉にする。

「マタ、今度：。」

「うん。：またね、アリスちゃん。」

ハンナさんは笑顔で手を振りながら、扉を通って、家を出て行った。

（本当に、本当によく笑う人だ。）

コーヒ―は苦かったし、ほっぺたはまだ少し痛かったけど、何も辛くて苦しいことなんか無かった。

4. アリスと買い物(1)

ああ…、とっても良い香り。ハンナさんのクッキーは甘くて美味しいのに、市販品のようにしつこい甘さではない。私はそれを、ひとつ、またひとつと口にしていく。

「一体ハンナさんはどうやって、こんなに素晴らしいお菓子を作るのだろう？」

そう思いながら、私は紅茶を一口飲む。そして溜息。

「…お姉ちゃん、遅いなあ…」

私は今日あった出来事を、早くお姉ちゃんに伝えたくて、仕方なかった。ハンナさんと、その親友のクレアさんに会って。それで…ハンナさんが家に来て。ピアノを弾く約束までしちゃった。

(お姉ちゃん、喜んでくれるかなあ…)

頬つぺたをテーブルに付ける。顔が火照っているのか、ひんやりとされていて気持ち良い。私は目を閉じる。心臓の鼓動の音だけが聞こえる。

ふと目を開くと、私は川辺の草むらにぼつねんと座っていた。頭の中から声が聞こえる。

「ほらアリス、早くこっちにおいでよ。時間が無いんだからさあ。」

「お姉ちゃん？」

と、何とはなしに向いた方向に、チョッキを着て帽子を被った、白いウサギが視界に入った。と同時に彼は言う。

「違うよ、僕だよボク、白ウサギ。久しぶりだねえアリス。最近君は随分と外に出ていってしまうから。」

「え？あの、恐らく初めて会ったと思うんですけど…」

私がそう言うと、ウサギは少し悲しげな声で言った。

「そうだね。ここではいつもそうなんだ。皆忘れちゃうんだよ。…まあ、こっちにおいでよ。ともかく時間が無いんだから。」

私はふと疑問に思っただけだ。

「これから、何かあるんですか？」

「さあね。でも、いつも時間が無い事だけは確かなんだ。だからほら、僕は焦っている。それが一番重要な事なんじゃないかい。」

私はどうも、彼の言っている事に矛盾を感じたけれど、それが何なのかは、ハッキリとは分からなかった。いや、彼の言葉には全く根拠が無い……とすら思えた。

「それよりさ、この穴の中だけれど、見ても何も思い出さないの？」と、私はいつの間にか穴の中に居る。暗いのに広い事は分かっている、白いウサギの姿は黒い背景と対になっていて、ハッキリと見えた。

「いいえ……でも少し、居心地は良いです。まるで疲れた後お家に帰って来たときみたいな、そんな安心感……」

ウサギは嬉しそうに言った。

「そうだろう！何せ君はずっとここに居たんだから。安心するのも当然さ。それなのに、君ったら急に出て行っちゃうんだから……」

私はどうも、ウサギの言うように、ここで暮らしていたという時の事を思い出す事が出来なかった。もしかすると、当たり前前の事過ぎて、そうとは気付けなかっただけかも知れないけれど。

「あの、ウサギさん、この穴はちょっと暗くて怖くありませんか？ランプも窓もありませんし……」

「何を言っているんだい？さっきから何度も言っているように、君はこの暗くて怖い穴の中で暮らしてたんだよ。僕も一緒に居たじゃないか。」

ウサギは少し声を荒げた。

「……でも、こんな穴の中に居たら、食事はどうしていたと言うんですか？」

「ああ。ほら、あれをご覧よ。」

彼は私の後ろを指差し、私は振り返る。それは井戸だ。

「井戸……？あれ、でも何だか甘い香りが……」

「そりゃあ、糖蜜の井戸だもの、糖蜜の匂いに決まって居るじゃないか。」

「糖蜜、ですか？」

「そうだよ。…アリスは糖蜜を食べて暮らしていました。とっても甘ったるくて、それも、幾らでも湧いて出てくる糖蜜です。無くなってしまう心配なんて、アリスにはちっともありませんでした。」

「でも、糖蜜だなんて、甘すぎやしませんか？それじゃあ病気になっってしまうんじゃない？」

「そうとも、だからアリスは病気でした。…それはそれは、酷い病気だったのです…。」

そう言ったきり、彼は黙った。カチカチと時計の音だけが頭の中で響いている。私は耐え切れなくなり、聞いた。

「えっと…、どんな病気だったんですか？」

ウサギは答えない。

「あれ…あの、もしもし？ウサギさん？」

私はそっとウサギに触れる。驚くほどに、硬くて冷たい。それでもなお、ウサギは生きていたようだった。

「生きてる…でも、まるで死んでいるみたい。…ウサギの穴にずっと居たら、皆こうなっちゃうのかな…？」

「…あれ、お姉ちゃん？」

「あら…おはよう、アリス。…ふふ、よく眠っていたようね。何度か呼びかけてたんだけど、全然起きないものだから…」

肩にはお姉ちゃんのジャケットがかかっている。そして空になってすっかり冷え切った白いマグカップを、私は握っていた。

「…これがあの白ウサギ…」

「ウサギ？」

「ねえお姉ちゃん、ウサギって冬眠するの？」

「んー、冬眠しないと思う。昔、よく冬の山で見かけたし…」

「それって、お姉ちゃんが『ヴァシリ・オホートニカヴィツチ師匠』さんと狩りをしていたときの話

？」

そうよ、とお姉ちゃんは、拳銃の整備をする手を休めてまで、私のノンセンスな質問に答えてくれる。

「そっか…ウサギは冬眠しないんだ…」

私がそう呟くと、お姉ちゃんはふと笑って言った。

「アリスって、本当に母さんに似てるわ。性格といい、仕草といい…そうね、顔も似てる。ときどき、母さんと話してるんじゃないかって錯覚するくらい。」

「そうなの？…でも、お姉ちゃんだって母さん似でしょ？」

「ううん、違うの。何て言うか…瓜二つだとかそっくりさんだとか、どちらかと言うとそういう意味では無くて…生まれ変わり、って言うのかな？母さんもよくピアノを弾いていたし、今みたいに突然、よく分からない質問をしたのよ。それで、ふっと思い出しちゃうのよね。それに、何より…」

一瞬だけの静寂が流れる。

「何より目が似てるのよ。多分、二人とも世界の見え方が同じなんだと思う。そう、だから…私は、アリスは母さんの生まれ変わりなんだと思うわ。」

（…それならば、どうして父さんは私を、母さんと同じように愛してはくれなかったのだろうか？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5107m/>

アリスとハンナ

2010年12月19日03時32分発行